
晴れた夜の星は輝く

YUNO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れた夜の星は輝く

【Nコード】

N8872Y

【作者名】

YUNO

【あらすじ】

ごくごく一般家庭で育ったアリシアは、自分の希望通りではないものの王宮の第三書庫で整理係として働くことになる。彼女の周りの人物、出来事によって、頑張ったり、解決したり、成長したり、そして、恋をしたりする、そんなお話。

00話 彼女の仕事

アリシア・メラーズは、ミッドチェザリア国の中央都市セイルアークにある、ごく一般家庭に生まれた娘であつた。年はもうすぐ17になる程で、どこかへ嫁ぐ宛がなければ、高等部卒業と共に職を見つけないならなかつた。しかしながら卒業まであと1ヶ月を過ぎても、彼女の働き先は未だ決定していなかつた。それはなぜか。彼女には、働き先として2択しか与えられていなかつたからだ。

「やっぱりあるとき風邪をおしてでも面接に行けば良かったんだわ。」

「あら、あなたあのととき熱が高くて歩けもしなかつたのに、どうやって話すつもりだつたの？」

「行けば何とかなつたかもしれないやつたでしょ、お母さん。」

「それでも、今更言つても遅いでしょう。さつさと決めておしまいなさい。」

そうは言つても、決められない。

アリシアは、父と同じように国家管理局で働きたかつた。文字を読んだり書いたり、そういうことが大好きだつたから、きつと事務員としてなら能力も発揮できると思つていた。幼い頃から父に異国の文字やこの国の文字の古代版などを習つてきた。いつかその知識を使つて、人のために仕事ができるのだと思つていた。けれど、事務の仕事を得るための試験や面接の重なつた1週間、わたしは見事に重度の風邪の症状に見舞われていたのだ。

ふらふらする頭と、定まらない視界、そして自分では3秒たりとも立つていられない足、それをもつてしても何とか会場へ行こうと

したが、部屋から出る前にアリシアは意識を失っていた。そうして目が覚めたのはそれから3日後。ふらつく足で部屋から出られたのはそれからまた4日後のことだった。そうしてアリシアは、これらの人生を決めるといっても過言ではない大切な1週間を、見事に失ってしまったのであった。

「だけれど、2つしか候補がないのよ？」

「2つとも他の人からしたら喉から手が出るような仕事場よ？」

「でも、わたしのしたい仕事ではないもの。」

「そう言っているは何の仕事もできないわよ？それとも、誰か他の人を見つけて結婚でもするのかしら？」

「……ちゃんと働くわよ。」

アリシアに与えられた2つの選択肢。それは、王宮に書庫整理係、または軍の食事配給係であった。ふたつとも働きに出る場所さえ聞けばそれはそれは素晴らしい仕事のように思える。それでも、書庫整理係、食事配給係というのは限りなくアリシアのやりたいことから遠くかけ離れ、この国の一般的な考えとしては2つとも中級、または下級の仕事とされていた。それにこの仕事のアリシアの元へ来た理由は、アリシア本人には無かった。父が国家管理局という、国家機関で働いているからだ。つまり、コネなのだ。国家機関で働くものにも子どもがいるのならば、条件なく国の一部の機関で働くことが出来る。しかしながらそれは、実力の問われない仕事、つまり結果を求められない仕事ばかりなのだ。

「アリシア、お前は本や書き物が好きだろう？とりあえず、王宮の書庫で働いてみたらどうだ？きちんと努力して知識を得て、高い夢を掲げてきたお前にとっては退屈な仕事かもしれないが、そんな退屈な仕事でも誰かがやらなければならんだぞ。」

「そうよアリシア。そして風邪を引いたのも、誰のせいでもなく、

あなた自身の問題だわ。いい加減駄々をこねるのはやめなさい。試験も面接もないのに仕事をもらえるだけあなたは幸運なのよ?」

父と母に諭すように言われても、アリシアは気乗りしなかった。自分が悪いというのは百も承知だった。だからこそ悔しくてたまらない。こんなはずじゃあなかったのだ。それでも過去には戻れない。自分のやりたいことじゃなくても、選ばなければならないことはある。

「うん・・・そう、そうね。やってみるわ、わたし。そこで仕事を評価してもらって、いつかは事務の仕事をもらえるように、頑張ればいいのよね?」

そう自分にも言い聞かせれば、父と母はようやく笑ってくれた。

00話 彼女の仕事（後書き）

始めてしまいました、このお話。コメディ要素があまりありませんが、楽しんでいただけるように書き進めていこうと思います。

登場人物や、国や地名などは全て実在のものとは関係ありません。むしろ国や地域はわたしが勝手に作った名前です。

どういった方向になり、結末を迎えるか、まだわたしもぼんやりとしています。この小説を書きながら、わたしも成長出来るよう頑張ります。

01話 彼女の始まり

涙を浮かべる父と、微笑みを浮かべた母に別れを告げ、大きな荷物を持ち、わたしは王宮へ向かう道を歩き始めた。やはりまだ自分の仕事にやる気を見出せない。父のコネで仕事を得るということもそれを甘んじて受ける自分のことも許せない。だけれど、わたしに選ぶチャンスを与えた、それを裏切りたくなかった。掴んで、自分のものにしてみせようと、そう決めたのだ。

「王宮だなんて、いつも遠くから見たことしかないわ・・・」

そう易々と一般人が入れるはずのない王宮は、セイルアークのちようど中心にある。丸い形の建物で、その周りをまた丸い芝や森が囲んでいる。国家機関で働く者の子どもに、そこで働くチャンスがあるといっても、王宮からの仕事もらえることはそうそうない。わたしが生きてきた中でも、1度あつたか無いかくらいである。

「それでも、どうせ王宮で働くなら、機密文書とか、王宮御達し書物とか、そういったものに携わってみたかったわ・・・」

などと、またひとりごちてみる。ひとりで愚痴を言うくらい、誰にも迷惑はかけないだろう。いかんせん、まだ他の仕事に未練がないとは言えないのだから。そうぶつぶつ言っている間に、王宮のちようど正面までたどり着いていた。泊まり込みでの仕事のために、女官や下女などのための宿所が与えられていた。まずはそこに向かえば良いはずだ。そう思い、そこへの道を聞くために大きな大きな門の番をしている体つきの良い男に尋ねてみる。

「何か用が？」

「アリシア・メラーズと申します。本日より、王宮付第三書庫整理係の仕事を頂いております。それ故に、宿所への行き方をお尋ねしたく参りました。」

「・・・アリシア、と言ったな。確認を得るまでここで待つて頂くが、よろしいか。」

「はい、お願いいたします。」

そういつてその体つきの良い男は別の門番に何か小さな声で耳打ちし、その門番が王宮の後ろへ走っていったあと、再びわたしに向き合った。

「メラーズ殿、仕事を得るのは初めてか。」

「はい。先日高等部を出たばかりにございます。」

「そうか。初めての仕事が王宮とは、なかなか大変だろうが、ここで働くということは、それがそのまま国民の生活へ直結すると考えても良いと思うぞ。誇りに思うと良い。」

「・・・そう、ですね。そう思えるように仕事をしたいと思います。」

「ああ。俺はローランド・タリスという。何かあれば何でも言うてくれて構わない。」

ありがとうございます、とそう言ったところで、先ほどの門番がこちらへ戻ってくる。確認がしっかり取れたようで、その門番の人はわたしに付いてくるように言った。ローランドさんにもう一度頭を下げて、宿所への道を歩く。

宿所は赤レンガで造られた3階建てだった。正面の入り口から反対側に位置し、王宮を囲む広大な庭の中にあつた。周りに花壇と湖があり、その向こうには森が広がっていた。わたしが案内されたのは第二宿所で、24人の人が住んでいるという。門番は宿所の前ま

で案内してくれた後、ハンナという宿所長に会うように言い、仕事へ戻っていった。忘れず御礼を言ったあとに受け取った荷物を抱えなおし、宿所の中へと足を踏み入れる。思ったよりも中は綺麗で、レンガの赤い色からは柔らかない雰囲気を受ける。これからここに住むのだと思うと、悪い気はしなかった。

「おや、あんた新入りかい？」

しばらく宿所の中を観察していると、背後から声が聞こえて思わず勢いよく振り返った。すると、そこにはピンクに近い色をした髪をひとつに束ね、たくさんの洗濯物を抱えた中年の女性が立っていた。肉つきの良い体と、血色の良い顔、今こちらを見ているその表情も、にこやかでどこか懐かしい感じのする人だった。

「あ、はい。アリシア・メラーズと申します。今日から王宮の書庫整理係として働きます。」

「ああ！アリシアね！人事から話は聞いていたよ。よく来たね、いらっしやい。あたしはこの宿所長、ハンナってんだ。好きに呼んでくれて構わないよ。すぐに部屋に案内するからちょっと待ってなね！」

そう言い終らない内にハンナさんはすぐ傍にあつた戸を引いて、そこに洗濯物を持ったまま入っていった。しばらくして出てきたハンナさんは、「こつちだよ」と言ってわたしを部屋に案内してくれた。

「あんたの部屋は1階の108。ここの入り口からは遠いけど、窓を使つていけば王宮からはいちばん近いからね！」

「わあ・・・素敵な部屋ですね！庭がすぐそこに見えるから、景色もとてもよいです。入り口から遠くつても全然気になりません！

窓は、使いませんよ！」

言って、ハンナさんと笑い合う。良い人で良かった。王宮に勤めている人というのは、どこか堅苦しくて、厳しい人だというイメージがあったけど、ハンナさんはまるで逆の人だ。明るくて、太陽みたいに笑う人だと思った。

「じゃあ、この部屋は好きに使って構わないからね。食事は、朝は7時から9時、昼は11時から2時、夜は6時から8時までで決めてんだ。食堂はさっきの入り口をすぐ左に行ったところだよ。洗濯はその右。分かったかい？」

「はい、有難うございます。」

「何かわからないことがあったら何でも聞きな！あたしでも、ここに住むみんなでも、みんな良い性分だから、あんたもすぐに慣れるだろうよ。」

そう言ってハンナさんは、じゃあまたね、と付け足して出て行った。改めて自分の部屋を見渡してみる。真っ白のベッドに、濃蒼の毛布とシーツ、小さい木製の机に、同じ木で作られたタンス付きのクローゼット。シンプルで背の高いライトが立っていて、扉の傍には全身が見える鏡があった。大きな窓は今は閉められているけど、淡い水色のカーテンは開けられているから、外の庭の雰囲気が良く見える。晴れた日はとても気持ちが良いだろう。とても気に入った。

今日から、ここがわたしの部屋。少し、胸が弾んだ。

02話 彼女の決意

荷開けをし、一通り部屋に並べたあと、案内状に記載されている通り、人事の人への挨拶と仕事内容の説明を受けるために王宮内へ向かうことにした。案内に書いてあった時刻は14時。今はまだ、13時40分。だけれど、遅れるよりは早い方が良さだろう。もしかしたら道に迷うかもしれないし。

そうして初めて従業員専用の入り口から、王宮へと足を踏み入れた。一応余所行きの格好をして、靴もそれなりのものを選んだはずだったけれど、それをもつてしても王宮の床を踏むことが躊躇われるほどだった。どこを見ても美しい以外の言葉は思い浮かばない。それほどまでに、今まで見てきた景色とは格が違っていた。何やら絵画や壺がたくさんあるのが分かるが、それらの価値は全く分からない。とりあえず自分の予想を遥かに超える価値であるだろうことは分かるため、それらと万が一にでも接触したりしないように十分に距離を置いて歩く。

案内状に記載されている地図、1階、西の方角のフロアを歩いてみると、「人事統括室」という文字が見える。ここにたどり着くまでに5分は経っているから、なかなか良い頃合だろう。ノックを2回する。すれば、「何用か。」という重低音の声が聞こえた。

「アリシア・メラースと申します。本日より王宮付き第三書庫整理係の仕事を頂いております。」

「入ってよろしい。」

許しの声をもらい、金のノブをもつドアを開けた。「失礼します」と言い、ドアを閉める。そこには5人くらいの黒と金の制服を着た男たちがおり、中でも一番大きな机に座る眼鏡を掛けた黒い短髪の

男は、一番高い官職のように見えた。そしてその人が部屋の中に入ったわたしを確認したあと、高級そうな椅子から立ち上がり、こちらへ足を進める。

「・・・13時47分。常識はあるようだな。」

「・・・は？」

「君もコネだろう？君のように、親の力で仕事を得た若者は、当たり前のように仕事に対してやる気がない。当たり前のように遅刻。当たり前のように欠席をする。実際そういう風に何通もほかの機関から報告を受けているからね。だから君のこともあまり期待はしてなかったよ。君は中等部、高等部などで成績が良かったみたいだから王宮への招待を与えたが、所詮はコネだからね。」

重低音ですらすらと辛辣な言葉を生み出すその人は、どうやらわたしを快く歓迎してはいないことが分かった。今さらコネだコネだといわれても、実際そうなのだから仕方ない。だけれどやはり、実際にこうやって見下されたり本人を知る前に評価されたりするのは悔しいのだ。

「わたしは確かにコネで仕事を得ています。それでも、わたしは仕事に遅刻したり、欠席したりしません。責任や、努力といった言葉を知っています。今はわたしのことをどんな風にお思いになっても構いません。それでも、わたしがきちんと自分の仕事をこなし、わがものと出来たときは、今おっしゃったお言葉、撤回していただけますか。」

「何とまあ、・・・生意気な小娘だな。・・・まあいい。正直、君に仕事が出来るとは思っていないからね。どうせすぐに辞めてしまっただろう。おい、マーティン、案内してやってくれ。」

絶対にやめたりするものですか！と反論しようとしたところで、

赤茶色の髪をした長身の男性が立ち上がる。綺麗な顔をしているな、と素直に思った。この偉そうな人もなかなか整った顔をしているが、どこか冷たい印象を受ける。実際性格も冷たいけれど。でもこのマーティンと呼ばれた人は、柔らかい印象をもっている。

「オスカー、お前はもう少し棘の無い言い方は出来ないのか？初めて仕事をしにやって来た女の子に、そんな言い方はないだろう。」

「うるさい。これが俺の性格だ。今更どうにもならん。じゃあ、あとは頼んだぞ。」

「あーあ、そんなだから未だに嫁さんもらえないんだよ。ねえ、えーと、・・・」

「あ、アリシアです。アリシア・メラース。」

「そう、アリシアちゃん。よろしくね、俺はマーティン・リード。マーティンって呼んでくれて構わないよ。あの眼鏡はオスカー・ブラックストーンっていうんだ。名前まで堅そうだろう？」

マーティンさんが言って、思わず噴出してしまった。どこからか冷たい視線を受けた気がするけれど、そんなものには気付かないふりだ。「じゃあ案内するよ」というマーティンさんの後を追い、人事統括室を出た。

「それにしてもアリシアちゃん、君なかなか度胸あるよ。あのオスカーにああやって切り返せる人物はなかなかいないからね。だってあの表情にあの声、なかなか怖いだろう？」

「確かに威圧感がありました。だけれどそれよりも腹が立ったんです。仮にも人事のトップにいる人が、人をそういう風に判断しても良いのか、って、思っただんです。」

「うん。それを声に出して伝えられるのは、君の強さなんだろうね。見ごたえあるなあ。これで俺の他にもオスカーに意見出来る人が増えたか。正直今まではあいつの雰囲気と口の上手さで、口答え

出来る人がいなかったんだよ、俺以外ね。でもアリシアちゃんは俺の良い味方、みんなの良い手本になりそうだ。」

「わたしとしては、そう何度も意見しなければならぬ程接触したくはないんですけどね……」

言うところ、マーティンさんは「そりゃそうだ」と声を上げて笑った。ああ、この人、綺麗に笑う人だ、と思った。きっと誰に対してもこんな風に、分け隔てなく接することが出来る人なんだろう。現に今日初めて会ったわたしが、こんなに穏やかに話せるのだから。

「さて、ここが第三書庫だよ。」

少しばかり大きめの扉の前で、マーティンさんは立ち止まった。

そして木と銀で出来た扉を開ける。そうすると、目に入ってきたのはたくさんの本……ではなく、たくさんの埃にまみれた本だった。

「……これは……なかなか、年季が入っているようですね……」

「誰も近づこうとしないんだ。こうなってしまうては目当ての本も見つけられないからね。」

「ということは、今は誰も使っていないんですか？」

「俺の聞く限りではね。それでもここにも重要な書物はたくさんあるし、これからもどんどん増えていくだろう。だから、君が必要なんだよ。君の仕事は、この第三書庫をきちんと使える環境にすること、そして誰にとっても使いやすく、分かりやすく陳列すること、さらに君も書物の知識を得て、人が利用しやすくすることだ。そうそう出来ることでは無いと思うけど、それでもこの量だ、きつとやりがいはあるんじゃないか？」

正直に言えば、今あるのはかなり大変だ、という感想だけだった。

ここが自分の仕事場になると思うと、少しばかり憂鬱になるくらいだった。それでも自分で決めたこと、オスカー室長にも強気なことを言ってしまった以上、もう後にはひけないのだ。やるしかない。

「はい、第三書庫整理係として、立派に仕事をこなしてみせます。」

03話 彼女とその人の出会い

マーティンさんに言われた仕事のスケジュールは、何とも簡単なものだった。朝9時に出勤、昼は12時から1時間の休憩、そのあとは6時に退勤、だそうだ。やることは決まっている。とりあえず向こう数ヶ月はこの片付けに専念することになるだろう。誰もいないはずの第三書庫で、がつくりと頭を下げ、思わずため息を漏らした。すると、足元に溜まった埃が、綺麗になくなっているところがある。それはどうやら人の足跡のようで、奥にある本棚まで続いている。

「マーティンさん、ここは誰も使っていないって言ってたのに・・・」

とりあえずその足跡を辿ってみると、どうやらその人物は東方の言語について調べ物をしていたらしい。ここ第三書庫は国々の歴史や言語、文化についての書物がずらりと並んでいる。その中でも言語に絞っているこの一角の、しかも東方の言語だけを集めた棚だけが、埃もなく、いたって綺麗な状態であった。これは誰かが継続してここに通っているという証だった。それも、東方の言語について調べたいのに、あまり時間のない、忙しい人だろう。なぜなら、東方の言語に関する書物は限られており、東方の国々の言語も30より少ないはずだ。ならばこの棚にある一つの言語に関する書物は少ないはず。それでもまだ狙いを定められずに色んな本を試している段階であるなら、よほど読むのが遅いか、よほど時間が無いのかどちらかだろう。

そしてその人物が調べているらしい言語が、ケペル国という小さ

な国で話されているものだった。その言語の元となった言葉なら知っているが、わたしもケペル語自体は知らない。

「ケペル語を勉強すれば、その人の力になれるかもしれないわよね。」

そう思い、埃叩きを右手、「ケペル語完全解説」という分厚い本を左手に、わたしは第三書庫を歩き回った。

なるほどケペル語は、やはりその元となったニルティン語を強く受け継いでいた。ところどころ単語は違うけれど、基本的な文法の並びや表現などはよく似ている。綴りも規則性を覚えれば解読も何とか出来るだろう。と、そういった結末にたどり着いた頃、いつの間にか自分が書庫の読書場の椅子に座っていて、埃叩きを握っていないことに気付いた。そして、辺りはもう真っ暗だということにも。

「・・・何時間没頭してたんだろう・・・。」

ああ、晩御飯も食べ損ねている。道理でお腹もすくはずだ。今から宿所に戻れば晩御飯に間に合うだろうか。第三書庫にある時計はどうも埃をかぶっていて見えない。まるで時計の意味が無いではないか。明日ここに来たらまずは時計を見えるようにしようと決めて、ケペル語の本を棚に片付け、さて宿所へ戻ろうとする。と、そこで木の軋む音がした。

「・・・先客がいるとは思わなかった。お前は何者だ。」

声を聞いただけでも、思わず背中がぞくりとした。明らかに身分の高い人だと分かる。年齢がそれほど高くないにしても、これほど威圧感と存在感、高貴さを出せる者はなかない。一度も顔を

見たことがなくても、それが王族の人であることが分かった。わたしよりも頭2つ分は高い身長をもち、体つきもまるで逞しかった。さらさらとした深蒼の髪がとても美しい。薄めの唇は血色が良く、強い意志を表す眉は凛々しく、整った形をした鼻は高く、そして何より、綺麗に二重の線を持った灰紫色の瞳が印象的だった。ここまですてきな男の人を見たことはなかった。

「お初にお目にかかります。わたくしはアリシア・メラーズと申します。本日よりこの第三書庫の整理係をさせて頂いておる者にございます。このような無礼な格好で大変申し訳御座いません。」

「整理係……？」

「はい、まずはこの第三書庫を使える状態にし、皆様に書庫のご案内をしたり、管理したりするようにと、任されております。」

「では、お前は書物について詳しいのか？」

「全ての書物を網羅している訳では御座いませんが、文字や言語といった分野においては、取るに足らない程で御座いますが、少しばかり習得しております。」

「！そうか、……では、ケペル語という言語は、知っているか。」

「……ケペル語で御座いますか。」

「やはり知らないか……。ケペル語はかなり東方のしかも小国の言語だからな。」

おそらくこの人が熱心にケペル語について調べていた人物であろう。それも、今日から勤めだした整理係に知識を得ようとするところ、よほど切羽詰っているように思える。

「いえ、ケペル語の元になったニルティン語ならば知識は御座います。ケペル語とニルティン語の差は大して御座いません故、おそらく簡単な文章であれば解読は可能かと存じております。」

「それは本当か！」

嬉しそうに目を輝かせたその人は、わたしが頷くと大きく笑みを零した。「やっと見つけた」と小さく呟いたその人は、着ていたシルクのシャツのポケットから大事そうに何かを取り出した。そして先ほどの笑みを消し去り、真面目な顔をして言った。

「お前に頼みたいことがある。この手紙を、解読してほしい。」

「わたくしに、ですか。」

「この王宮にお前以外、ケペル語を操れる者はいないし、不用意に他の人物に知ってもらっては困る内容でもある。お前、たとえこの内容を解読しても、それを俺以外の誰にも言わないと、約束できるか。」

正直に言えば、厄介なことを頼まれていたと感じた。この内容がどんなものであるにしても、他の人に見せられないくらい重要なものであるそれを、わたしが抱えて良いのだろうか躊躇する。それ以前に、ケペル語をしつかり操れなかったらどうするのか。どんな罰が与えられるのか。そういった保身までも考えてしまう。それでもこの人の瞳を見れば、それに従わなければならないような気にさせられてしまう。これが、位の高い人の持つ力なのだろうか。

「・・・はい。約束いたします。」

言った。言ってしまった。その人は数秒わたしと目を合わせたあと、問題の手紙をわたしに手渡した。両手で受け取ったわたしに、「大事なものなんだ」と付け加えた。

「王太子殿下——！殿下、どこにいらっしやいますか！公務がまだ終わっておりません！殿下——！」

承知いたしました、と答えたかったが、それは扉の外の大声によつて止められた。叫びながら廊下を走っているだろう声の主は、今にも泣きそうな声で王太子殿下を求めている。と、そこで目の前にいた人物が嘆息した。

「俺は戻らなければならない。明日またここに来る。・・・アリシアと言ったな。くれぐれも宜しく頼んだぞ。」

そう言つてその人が書庫から出ていった後すぐ、「殿下！こんなところにいらしたんですか！」という声が聞こえてきた。まさかそうなのではと思つてはいたが、やはりそうだったのか。王宮に勤めだして1日目で、最高位にも成り得る人物に会うとは思つていなかった。その事実をじつくり認識したあとわたしは思わず膝を折り、その場にへたり込んでしまった。しかしながらその後には間抜けな腹の音が書庫に鳴り響き、とりあえず夕食を求めて宿所に戻ることにしたのである。

これが、わたしとハウエル王太子殿下の、出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8872y/>

晴れた夜の星は輝く

2011年11月26日18時51分発行